

1 はじめに

教育研究愛知県集会在、愛知県産業労働センターにおいて、盛大に行われ、ここに愛知の国語教育第60集をつくることができました。とりわけ、教育研究愛知県集会の正会員になられた先生方の真摯で熱意あふれるとりくみ、そのとりくみを支え、温かく励ましてくださった分会・地域の先生方や父母の方々に感謝いたします。

これまで愛知の教研活動(国語教育)では、子どもたちを見据えた実践を積み重ね、数多くの教育的財産を築いてきました。その中心となるのは、ことばの教育を通して、認識諸能力をのばしていく、つまり「人間形成を目的としたことばの教育」という考えです。

学習指導要領では、予測困難な時代を生き抜く資質・能力を高めるべく、「新たな学校文化の形成」「学校の意義」がとりわけ重視されています。また、よりいっそう系統的に学習内容をとらえ、すべての教科のベースとなり、子どもたちにこれからの時代に必要な「ことばの力」を身につけさせることが肝要となってきます。一方で、子どもの「主体的・対話的な学び」の重要性や、学びの必然性や意義をふまえた授業構想、学習過程もこれまでと変わらず重要です。また、「個別最適な学びと協働的な学びの一体化」が、これからの教育には欠かせません。さらに、一人一台タブレット端末が本格的に導入され、ICT機器を取り入れた授業についても考えていかなければなりません。

しかし、学校現場では、よりよい授業ができないものかと、教員が日々悩みながら奮闘している一方で、言語活動が重視されるあまり、本来、活動を通して身につけさせなければならない「ことばの力」がおろそかにされている実態があります。また、教員どうしが、教育の理念や留意事項といった経験値を伝えるための時間や環境が乏しくなっているという現状もあります。

限られた時間の中で、深く、質的に高い学びを行うためにも、国語科の授業で何を行い、どう評価するのかという視点をもつことが大切です。

そこで、そのようなゆたかな学びにむけて、国語科として大切にしたい観点を以下のように考えました。

【「ゆたかな学び」のポイント】

○「基礎・基本」

国語教育では、4つの領域と言語事項のそれぞれの学習において、特に言語活動を重視しながら子どもたちのことばの力を育成していく。「読むこと」の学習では、想像力を育むとともに、ことばが文脈の中でどう使われているのかを考える基礎となるべき語彙力を身につけさせたい。その学びをいかして、「書くこと」「話すこと・聞くこと」などの学習で、自分の考えを発信する基本的な力を身につけさせていきたい。

○「生きてはたらく力」

子どもたちがことばの学習を行う際には、学習の中心を担う言語活動の内容が、子どもたちの生活と密接に関係し、学ぶ必要感を感じられることが大切である。それが感じられれば、子どもたちは自然とその学習に魅力を感じ、自分自身で課題を見つけ、身につけたことばの力を活用して課題を解決していこうとする。そのためにも、教材と実社会や実生活との関わりに重点を置きながら、学習を進めていきたい。

今こそ、新しい教育の時流をふまえつつも、不易と伝統にかかわる「守るべき部分」も新たな視点から検証し、教育課程を自主編成してきた過去の教研活動の実践に学ぶべき時なのではないかと思います。

この愛知の国語教育第60集が、少しでもその役割を担っていれば幸いです。

II 研究の経過

1 読み方教育

(1) 文学的文章の読み方教育

これまでに、読み方教育がめざすものとして、「人間の生き方を探究すること」や「現実に対処し、変革していく力をつけること」などが確認されてきた。それらを達成するために「作品の構造が緻密で話の展開に必然性があること」「登場人物がいきいきと描かれていること」「感動の質が高いこと」が教材選択の視点として必要である。

文学的文章を「読む」ことは、書かれていることば一つ一つを大切に、語句の意味、場面での使われ方、文と文とのかかわりなどから読み取れるイメージをふくらませ、「確かに」そして「イメージ豊かに」読んでいくことだと考える。イメージをことばにし、他者と意見の交流をしていくことで、読み手の頭の中に世界が明確に浮かびあがる。

(2) 説明的文章の読み方教育

説明的文章では、「ことばと結びつけて認識諸能力を育てる」ことをねらいとしている。そのための視点として、「厳密なことば遣いで、論拠となるべき事実が示されていること」「正しい認識の上に立ち、子どもにとりまく状況や発達段階をふまえていること」「段落構成が適切で、論理展開に無理や矛盾がないこと」があげられる。

文章の中のことばや表現には、それに対応する事実や認識のあり方が存在する。そうしたしつこく読み取ることを通して、認識諸能力をさまざまに働かせ、表現されていることを具体化して考えることや、書き手の論を自分の考えと比較したり、自分の知識や経験に照らし合わせたりすることが大切である。

2 つづり方（作文）教育・言語の教育・音声表現の教育

(1) 何のために何を

愛知の教研では、これまでに、人間形成にかかわる側面と言語の技術的側面を一体的にのぼし、心の発達の面でも調和のとれた人間を育てることをめざしてきた。そのためには、表現する活動の指導の際には、「何のために伝えるのか」「誰に伝えるのか」といった目的意識や相手意識をはっきりさせるためのたぐや支援の方法を考え、書いたり話したりする活動への意欲を高めていくことが重要である。

(2) 何をどのように

① 自分の思いや考えを相手に伝えたり表現したりする

自分の考えたことを、正しく、そしてわかりやすく表現できるようにするための力を身につけさせることが大切である。子どもたちの主体性を尊重した単元の活動計画をすすめる傾向があるなかで、教員が、当該学年で身につけさせたい基礎・基本的な力を意識した上で、授業計画を立てて、指導・支援をしていく必要がある。

② 主体的に学習に取り組む

言葉で表現する活動を行う際、何を何のために誰に伝えるのかという目的意識をもたせて、そのためにどのように学習に取り組むとよいのかを自ら考えたりすることを大切に、「基礎・基本的な表現の力の定着」を意識しながら、主体的に取り組ませる必要がある。

③ 豊かに表現する

豊かに表現するためには、子どもたちが興味をもちやすい教材を選定したり、体験をもとにした内容を表現させる活動を行ったりするなど、子どもたちの思いを引き出すための工夫が必要である。また、表現技法や語彙力をのばす活動も充実させていきたい。

III 研究の内容

1 指導事例

研究主題 本文の語句を根拠にし、読みを深める子の育成

(1) 研究のねらい

四月、初めての国語の授業が始まった。物語文「とん こと とん」では、登場人物の気持ちに迫る学習活動を行った。子どもたちは、学習内容に興味をもち、積極的に発言をすることができた。しかし、本文に即さずに、自分の想像で話を広げ発言をすることがあった。そのため物語の内容や発問から話題がずれていってしまうことがあった。国語科では、本文の語句をもとに、教材の内容に即した考えをもち、意見を交流し、深めていくことが大切である。物語の内容に興味をもち、自分の考えや友だちの意見をもとに想像を膨らませ、物語を楽しむことのできる子を育てたいと考えた。

しかし、1年生の1学期ということもあり、言葉だけをたよりに、登場人物の気持ちや場面の様子を読み取る活動に慣れていなかった。そこで、物語の場面や登場人物の気持ちなどを読み取る際に、体験的活動を取り入れ、登場人物の気持ちや場面の様子を演じることで具体的に想像することができるようになるのではないかと考えた。発言については、授業中も積極的に話す様子が見られる。しかし、自分の考えをノートや学習プリントに記述させると、時間がかかる上に、自分の考えを満足に記述することができない現状があった。そこで、タブレット端末を活用し、キーボードで日本語入力をさせることで、記述が困難な子どもたちでも、効率的に学習活動に取り組むことができるのではないかと考えた。

(2) 研究の方法

① 単元 小学1年「おおきなかぶ」

(東京書籍1年)

② ねらい

ア 語のまとまりや言葉の響きなどに気をつけて音読している。(知識・技能)

イ 「読むこと」において、場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体をとらえている。(思考力・判断力・表現力)

ウ すすんで場面の様子や登場人物の行動などの内容の大体を捉え、今までの経験や学習を生かして、音読を楽しもうとしている。(主体的に学習に取り組む態度)

③ てだて

・読み取る段階でタブレット端末を活用し、本文の語句に着目させることで、語句を根拠に考えを構築できるように、以下の3つを設定する。

ア 授業支援クラウドを活用し、キーボードは日本語入力にする

イ 言葉見つけ

ウ イラストや挿絵の活用

・深める段階で、対話活動を取り入れたうえ、体験的活動を行うことで、人物の心情

中してきた。しかし、「まだまだ」抜けなかったかぶが、犬が仲間に加わっても抜けないことから「まだまだまだまだ」へと表現が変わってきていることに気づいている子が少なかった。そこで、第二発問「『まだまだ』と『まだまだまだまだ』の違いは何か」を提示した。意見を求めると、「まだまだ」はあと少しで抜けると思っていたというのに対し、「まだまだまだまだ」はもっと力を入れて引っ張ったのに全然抜けないという考えが出されてきた。仲間が増えても抜ける手ごたえがないということが意識できたところで、読みを深めるために動作化（てだてカ）を行った。代表児童として二人を指名した。二人の動作化を見た後、二人の動作についてどうであった問いかけた。すると、「まだまだ」と「まだまだまだまだ」では動きが変わっていないという反応であった。そこで、「どこをどうしたらよりふさわしい動作になるかな」と問い返した。児童Aが「まだまだまだまだ」の動作について「手を後ろに下げたら力が入る」と発言した。その意見に続けて、「少しずつ離れるようにする」、「体をもっと動かす」との意見も出てきた。「まだまだまだまだ」では、もっと力を入れて動作をしなければならないということをみんなが共有したところで、もう一度代表児童に動作化をさせた。児童Aの意見をはじめとする、「まだまだまだまだ」の動作についての意見を参考にした結果、代表児童は手をしっかりと後ろに引き、力を入れている様子を表すことができた（資料3）。代表児童による動作化への意見や、その動作の変容などから、児童Aは本時の場面にふさわしい登場人物の様子を具体的に読み取ることができるようになってきていたのである。



【資料3】
代表児童による動作化の変容

⑥ 第六時…いよいよクライマックス

動作化では、児童Aをおじいさん役に指名した。おじいさんが大きなかぶ（大玉につけたロープ）（てだてエ）を持ち、おばあさん以下がそれぞれ前の人の体をつかんだ。次に、「うんとこしょ、どっこいしょ」の声を学級全員で掛けることを確認した。

一度目の動作化を行い、「力が合っている」ように見えるかと問いかけた。すると、「合っていない」という反応があったので、「どうすれば力が合うか」と問い返した。「タイミングを合わせること」、そのために「掛け声で動きを合わせること」、そして力を入れるために「腰をしっかりと落とすこと」というポイントが出てきた。この意見をもとに、代表児童の動作を深めていった。「うん」で体を前に、「とこしょ」で後ろに、「どっ」で前に、「こいしょ」で後ろに動いた。すると、ばらばらであった前後の動きがそろい、腕をしっかりと伸ばし、腰を落として抜く動作をすることができたのだ。児童Aを含めた6人の動きが、意見を参考にしたことで合うようになった（資料4）。



【資料4】動作化に変容が見られた代表児童たち

動作化を通して、力を合わせることに深くすることができたように感じる。代表児童の動きが合ってきたところで、大きなかぶ（大玉）を結んでいたタフロープを切断した。力強く引っ張っていた勢いで後ろに転んだ子どもたち。まさに、かぶが抜けた瞬間であった。このあと、子どもたちは両手を挙げて喜びを表現した。その姿はまさに、教科書に描かれている登場人物6人の姿と同じであった。この動作化を通して、子どもたちは、登場人物になりきり、物

語の情景と心情を実感していった。子どもたちの満足気な表情と歓声の中で実践は幕を閉じたのである。

(4) 成果と課題 (成果：○ 課題：●)

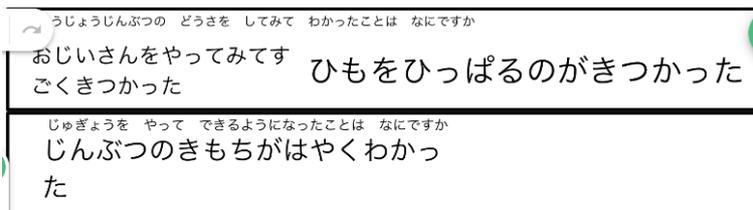
- タブレット端末を利用し、授業支援クラウド（てだてア）内に日本語入力で考えを記入させたことで、多くの意見を引き出すことができたように感じる。児童Aは単元後の感想で、「わかりやすかった
タブレットにやること
が全部書かれていたか
らわかりやすかった」
タブレットを つかった じゅぎょうは わかりやすかったですか。どのようなところが わかりやすかったですか
わかりやすい たぶれっとにやることがぜんぶかかれてたからわかりやすかった

【資料5 児童Aの単元後の感想】

（資料5）と回答していた。タブレット端末があったことで、学習活動がとりくみやすくなったものと捉えることができる。

- 本文の語句に丸を付け、考えを発表していく言葉見つけ（てだてイ）を行ったことで、児童らは物語の流れの中で想像力や思考力を働かせて、自分の意見を述べるようになった。第一時の登場順を考えたとき、登場人物のイラスト（てだてウ）があることで、視覚的にわかりやすくなり、また楽しく学習活動に取り組むことができた。お面を付けて動作化をすることに対して、児童Aは「やったあ」と反応するなど学習意欲を高めていった。

- 児童Aは、単元後の感想で、「おじいさんをやってみてすごきつかったひもを引っ張るのがきつかった」（資料6）と回答した。おじいさんは、最初



【資料6 児童Aの単元後の感想】

から大きなかぶを抜くために力を入れて引っ張っていた。おそらく物語の中でも、児童Aが感じたように、「すごきつかった」のではないかと考えることができる。大玉を大きなかぶに見立て（てだてエ）、実際に抜く動作化（てだてカ）を取り入れたことで、場面の様子や登場人物の心情について具体的に想像できたものと考えられる。第四時に他の児童が動作化を行った際には、「力を入れるためには手を後ろに下げる」という意見を発言（てだてカ）し、代表児童の動作化を変容させる一助となった。第六時の代表児童6人による、大きなかぶを力を合わせて抜く動作化を行った際には、他の児童の意見を参考にしたことで動作が変容していく様子を体験し、場面の情景や登場人物の心情を具体的に想像することができた。本単元を終えてできるようになったことには、「人物の気持ちが早くわかった」と回答した（資料6）。

(5) おわりに

本研究を行うにあたって、国語科教員として、今後の学習の基礎となる一年生の段階で国語を好きになってもらいたいと考えた。単元後の感想で、タブレット端末を活用した授業について「面白いからわかりやすかった。遊んでいるみたいだった。」や「楽しいし、わかりやすいしがんばってやればちゃんと、できるから楽しかった。」など、学習意欲が喚起されたように感じるものが多く見られた。キーボードの日本語入力を使用したことで、どの児童も考えを記入することができており、タブレット端末を授業で活用していくことの有効性を感じた。今後もタブレット端末を活用した実践を行い、児童の学習意欲を喚起し、国語が好きな児童の育成を行っていきたい。しかし、一年生としてノートに記述する学習活動も大切であ

る。そのため、タブレット端末の効果的な活用とノートとの併用を考え、国語が楽しく面白いと思える実践を目標として新たな実践を行いたい。

IV 第74次教研のまとめ

1 読み方教育

(1) リポートの概要

子どもたちの疑問や興味をもとに展開される実践が多くみられた。読む力を身につけさせ、深い読みにつなげるにはどのようにしたらよいか、報告されたリポートをもとに、討論が展開された。

(2) 第74次教育研究愛知県集會に提出されたリポートの傾向

① 読む活動を通して、どのような力を身につけさせるのか

子どもどうしが協働して課題解決に向かう中で、さまざまな考え方や表現の仕方をお互いに学び合うことで、深い読みにつなげる実践が多く報告された。また、読み取ったことを実生活と関連付けたり、作品の時代背景や作者について学んだりすることで、生徒が積極的に読みたいと思える効果的な実践も報告された。討論では、効果的な話し合いにするためのだてや読むことに抵抗感がある生徒への支援の方法について意見交換が行われた。

② 読む力を高めるための教材の活用方法

読み取ったことから、意見文や手紙、人物の紹介カードを作らせるなどの実践が報告された。書く目的やどのような相手に書くかなどを意識させることで、一つ一つの言葉や表現の仕方にこだわり、言語感覚を豊かにする効果があるだてが数多くあった。また、自主教材を用いた実践の報告もあった。討論では、目的意識の高め方や発達段階に応じた指導の仕方、自主教材を扱う際の留意点などについて意見交換が行われた。助言者からは、高めたい力を明確にし、どの教材で行うのかを吟味すべきだと助言があった。

③ 読む力を高めるための指導の工夫について

単元別自由学習や群読など、読む力を高めるためのさまざまな工夫を凝らした実践が報告された。読み取りの視点を複数提示し、その中から選ばせて話し合いをさせたり、子どもから出てきた疑問をもとに考えさせたりすることで、生徒主体で読む力を高める工夫が報告された。また、まとめや振り返りの仕方を工夫することで、学びの定着を図ったり、教員が個々の学びを把握したりすることが大切であるということであった。

④ 読む力を高める主体的・対話的な学び方のあり方について

主体的にICT機器を活用した授業実践が多く報告された。ワークシートやタブレット端末のデジタルホワイトボードなどを用いて、視覚的に他者の考えを比較できるようにすることで、対話が生まれやすくなったということであった。また、気づきや考えを言語化する力を身につけると同時に、読み深め、考えを広げられるようになるという効果がある実践であった。討論では、話し合いのテーマ設定の仕方や話し合いにおける評価の仕方などが話題になった。

(3) 今後の課題

- ① 読む力が十分に育っていない子への対応はどのようにすべきか。
- ② 読みが深まっている子にとってのグループ活動の意義とは何か。

2 つづり方（作文）・言語の教育・音声表現の教育

(1) リポートの概要

つづり方（作文）の教育4本と、言語の教育3本、音声表現の教育3本のリポートが報告された。子どもたちの実態を見つめて、どのような子どもを育てるのか、文字言語・音声言語のよさを生かして、どのような力を育てていくのかについて討論が展開された。

(2) 第74次教育研究愛知県集會に提出されたリポートの傾向

① つづり方（作文）の教育

〈何のために・何を〉

テーマを児童生徒の実生活と結びつけたり、思考ツールを活用したりして作文を書く実践が報告された。討論では、作文の評価の仕方のポイントや協働的な学びとはそもそもどういうことかを授業実践を交えながら確認された。

〈何を・どのように〉

I C T機器や漫画を活用しながらモデル文を提示し、自分の思いを詩や生活作文に表現することをめざした実践が報告された。討論では、評価基準、技法や気持ちを言葉で表すための教員の働きかけ、今後の活用方法について話し合われた。

助言者からは、単元のゴールを示すことの大切さや前向きな推こうの仕方、実生活と作文とのかかわりによる主体性の育み方について助言を得た。また、読み手を常に意識し何度も作品を読んでもらうことでよりよい文章ができあがるとの助言を得た。

② 言語の教育

〈何のために・何で / 何を・どのように〉

書写の学習をその他の学習や教育活動に位置づけた実践や、できることが増える喜びを実感し、夢中になって表現活動に取り組む子どもの育成をめざした実践が報告された。討論では、子どもたちの気付きから活動を広げることの大切さや既習事項を定着させるための方法について話し合われた。

助言者からは、教科を横断し、継続的に書写指導を行うこと、既習事項を教室に掲示し、自然と目に入るようにすることなどの有効性について助言を得た。

③ 音声言語の教育

〈何のために・何で / 何を・どのように〉

学びを自己決定しながら話す力を高めることをめざした実践や、自分の考えを整理し、相手にわかりやすく伝えるために思考ツールを活用した実践が報告された。討論では、話す様子を子どもどうしが互いに評価する場面において、話し方以外にも目をむけさせるためのだてや、話すことが苦手な子への支援について話し合われた。

助言者からは、単元の途中にミニテストを行い、どのくらいできているのかを子ども自身が把握すること、実際にやらなければ高まりはみられないため、多くの経験を積ませることが大切であると助言を得た。

(3) 今後に残された課題

① 他者とのかかわりの中で言語を習得させるための支援

② 思っていることを素直に表現できるようにするために自尊感情を育てること

③ 書く力を高めるために、書いたものをより多くの人に評価してもらえる場面の設定

V 終わりに

今回行われた第74次教育研究愛知県集会（国語教育）では、提案レポートを中心とした熱心な討論が行われた。一つ一つの実践が、先生方の熱意あふれるものであり、今後の愛知の国語教育をさらに推進していくものだと感じられた。

本年度、「文学・その他」「作文・その他」どちらにおいても、子どもが主体的に取り組む授業展開や、協働的な活動を充実させた実践が報告されていた。子どもたちが「学ばされている」と感じるのではなく、自ら学び、教員や他の子どもと「ともに」高め合っていくことが大切である。

教科書をただ教えるのではなく、身につけさせたい力を、わたくしたちが明確に意識して子どもたちのために教育をすすめていきたい。今後も教研の実践が、愛知の国語教育の発展に寄与することを願う。